

のは別府府籙速見地域ほか四つです。
佐伯地域広域市町村圏事業について、住民の要望は次の通りです。

佐伯市では

○ 道路の整備 ○ 無料駐車場の設置

○ 交通事故をなくすための施設や、事故が起つたとき、の無料相談所の開設 ○ 子供の遊ぶ場の設置

○ 上下水道の完備など。

各町村では、

○ ゴミ処理場やゴミ収集車の設置 ○ 児童公園の設置

○ 公害対策 ○ 年寄りのいこいの場、老人ホームの設置

○ 診療所の増設 など。

佐伯広域圏は、海岸部と山間部に大まかに分けられ、平田部が極めて少ない、複雑な地域です。社会的、経済的にそれぞれ立場を異にする諸条件の中で、一市八ヶ所村が一地点を見出すには、幾多の障害点があります。『豊かな住みよい地域の建設』という共通テーマに向かって、地域住民は、県内地域の発展にまい進しなさいものです。
(この項おわり)

龍溪・矢野文雄先生の顕彰

(S.五。年九月)

佐伯ライオンズクラブへ会長谷川孝芳氏が、記念行事の一つとして、三の丸に、矢野龍溪の顕彰碑を建てようという。これはいいことである。

矢野龍溪は、われらの御土佐伯が生んだ、当時の日本第一級の人物であった。御土の誇りとして龍溪をみんなが理解する、よい施設の出来ることを期待しよう。(羽)

研究

わがふるさと、元田誌

会員 市野 頼 仁

(出身地 南海部郡弥生町大字大坂本)

まえがき

前号にちよつと書かせていたように、元田誌をまとめることになった。それで、元田誌の目次を決めるように考えてみた。しかし、今から実地調査をしたり、何回となく元田の人々と協議をしたり、あるいは佐伯史談会の方々のご意見も取り入れたので、変更することもありうると思っている。

ただ、編さんの方針というか、態度については、できうるかぎり真実を探り、それを親しみのある文章にして、今生きている人々とその子孫のために、楽しんで読めるものにしたい。それだけは変えないつもりである。

目次 (案)

一、位置と自然

二、部落の歴史

1. 室町時代から江戸時代へ

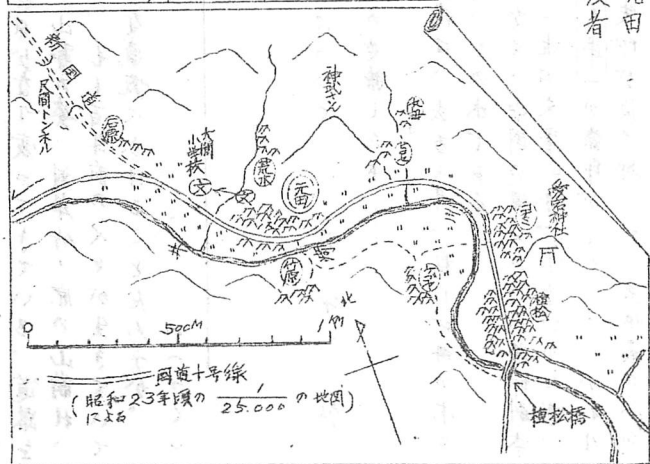
2. 明治時代から現代まで

三、祭りごと

1. 天神さん

2. 火伏さん

3. 風流・杖踊り



四、神武さんと
国道と河川

1. 国道と井崎川の変遷
2. 荒水と北相の道
3. 水道及び砂防工事
4. 荒水谷砂防と流通溝
5. 元田水路と水揚場の設置

1. 災害
2. 伝染病
3. 共有財産

4. 村行政に夫々さあつた人々
5. 大間小学校と元田
6. 出征者及び戦没者
7. 人物と名物
8. 元田誌年表

一、位置と自然

元田部落は弥生町の大坂本にあり、国道十号線に沿うた農村集落である。小川一つで大字尺割と接しているの
で、西部の児童たちの学ぶ大間小学校が、明治四十四
年に開設され、昭和十八年校地がせまいので谷をへたて
たすや向こうに移るまで、三十数年間、いれ今春まで数
えると六十数年間、元田は学校区を中心妙存在であった。
弥生町役場のある所の中心地相水から国道三まの距離
の所にあり、佐伯市まで十時、交通事情はきわめてよい。
元田には、荒水、本田、竹ノ原、広瀬(丸柵を含む)
の部落があり、お寺の過去帳は一括して元田とせず
すべて四つの地名で記録されている。

部落の象徴ともいえる神武さん(五郎)は丸山と呼ぶ
富士山を思わせる美しい姿から、元田富士ともいう。そ
の南麓に国道十号線が、大分から宮崎へ向って走り、そ
のせまい山裾に元田の集落がたまり、西の山麓から井
崎川に直角に注いでいる荒水川の上流に荒水部落があり、
それと対照的に東の山麓に広瀬川が流れており、上流に
丸柵、下流十号線近くに広瀬の小部落がある。(上図参照)
これらの集落を高見の見物でもするかのようには、井崎川
をへたてた対岸斜面にあるのが竹ノ原であつたが、つい
先月最後の一新が、竹ノ原に近しい川べに新築移転したので
この竹ノ原部落は消えてしまった。

元田部落の背後も正面(川向う)も、百数十坪の山々が
せまり、その間の二、三百坪に、川、堤防、水田、国道、
そして家屋が配置されている。このように高い鼻はつか
えるような狭い形相である。しかし国道にしても井崎川
にしても勾配を感じないので、河谷集落の名は当たるま
い。

しかし、元田の自然は分なり変りてきてゐる。道隆をはじめ、集澤、水田、山野の姿、対岸竹ノ原の山崩れ、井崎川の護岸工事など、もし百年前の人々が生きていてこの姿を見たら、どんな感慨にふけることだらうか。

研究

「徐文長文集」について

羽柴 弘

一 明石秋室の愛読した本

九州大学の上尾助教は、去る七月、私に四冊の本をお貸し下さった。それがこの本である。

開いて見たら和書でなく、中国の漢文の、木版印刷本であった。一瞬、私は「佐伯文庫」本ではないかと思つたが、どこにも「佐伯文庫」の捺印がなく、そのかわりに「明石如磨寄贈」の朱印が強く押され、表紙裏に小判型の「九州帝国大学図書館」の蔵書印があり、「昭和十九年三月三十一日、第一六一一九一號」と、登録の文字が書きこまれている。つまりこの四冊の本は、九大図書館の所蔵本で、今春、中島子玉と明石秋室について調査にこられた上尾先生が、関連深いこの本を、格別のお計らいで貸して下さったものである。

この四冊の「徐文長文集」は、お隣り中国の本版本で、印刷文字面はきわめて鮮麗であるが、惜しいことに用紙が薄く、すでに折目のきれているところがかなり多く、ページをめくるのに少々苦勞した。

重ねて京子が全部漢文、割点(返り点送りかな)の全くない、いわゆる白文である。たとえは、第一冊のはじめに述べている徐文長の伝記の冒頭はこうである。

徐渭字文長山陰人幼孤性絶警敏九歲能属文——
私は、乏しきをかえり及ず、こゝ読んで見た。

徐渭、字ハ文長、山陰ノ人ナリ。幼ニシテ孤、性絶
エテ警敏、九歲能ク文ヲ属ス——

内容は悉く詩文である。四言・五言・七言の古詩・律詩・排律・絶句と、大部分は詩であるが、なお若干の贊銘・記・碑・伝・墓誌銘・祭文などに及び、徐文長の代表的主要詩文を網羅して見たと見た。

私は、そこで鶴城高校の図書館にしかけて人名辞典や中国文学史などによって、徐文長についてしらべて見たが、要約すると、次のようである。

徐渭(一五二一—一五九三) 中国、明代の文人、浙江山陰に

生まれ、字は文長、天地山人、青藤道士と号し、田水月とも署名した。その学才は幼少の頃から聞こえ、詩は李白・李賀の間、文は蘇軾の流れを汲む。天才超拔、詩文にすぐれ、書画に巧みであった。総督胡宗憲の幕客となり、兵謀に参謀して功あり。著書に「徐文長文集」「李長吉詩集批注」等二十数種に達す。

ところで、この徐文長の詩文は、今まで私など全く接したことがなく、高校の漢文の本などにも見かけたことのないほど、馴染はきわめてうすかった。しかし前記(側点で示す)李賀(字ハ長吉)は、明石秋室が傾倒した晩唐の詩人である。倏然この文集は私にとって身近なものとなった。

依伯藩最高の常識者明石秋室が、その当時、どのような見識のもとに、二百年以上も前の人、明国の徐渭の文学をえらび、どういふ手づるでこの中国からの舶載本(輸入書)を手に入れたものであるうか。いずれにしても李賀 徐渭 秋室のつながりに、私は秋室の面目の躍如